

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

ネパールからのたより……………P 3
北海道・二風谷を訪れて……………P 4

霊丘県上寨鎮下寨北村は太行山脈のなかにある自然条件の厳しい村で、1戸あたりの耕地が3.8畝、1人あたり年収150元(1元=13円)です。この小学校に協力して果樹園を建設しそこからの収入を学校の運営にあてることにしています。(21号、22号参照)



【上】 霊丘県上寨鎮下寨北村小学校の新築予定地
【下】 GENが協力する同小学校の果樹園で準備すすむ

黄土高原ワーキングツアー

3月24日出発、ヤオトンの建設も ひきつづき団員を募集中!

3月24日から黄土高原に派遣するワーキングツアーの団員を、ひきつづき募集中です。ことしは小学校付属果樹園など数か所で共同の植林作業に参加するとともに、こんげん 渾源県西留郷にGENの宿泊所を建設します。現地の伝統的な建築様式であるヤオトン（ドーム型

のレンガづくり住居、4室・約80㎡）で、夏のワーキングツアーからここに宿泊します。大同県徐町郷では郷政府に泊まり、農村の1日を体験します。

往路は、昨年夏に大好評だった船の旅。内容充実の94春のワーキングツアーにぜひご参加ください!



▼主な活動

山西省渾源県・大同県の数か所で植林活動に参加し、待望のヤオトンヤオトンを建てます。北岳・恒山恒山（懸空寺）、雲崗石窟、長城（宏賜堡）などの観光もおこないま

植林作業がひと段落
93年夏のワーキング
ツアーのメンバー

す。日本の私たちには想像を絶する黄土高原の風景と人情を満喫できることでしょう。

▼スケジュール

1994.3.24 神戸発燕京号で天津へ
3.27~4.4 山西省大同市で活動
4.5 北京市内観光
4.6 北京→大阪（飛行機）
航空便のつごうで帰国が1日早まる
かもしれません。

▼定員と締切り

15名。最終締切は2月25日ですが、定員に達ししだい締め切りますので、お申込みはお早めに。

▼費用

20万円（交通費・宿泊費・食費・ビザ手数料・ヤオトン建設費の一部負担・GEN会費1年分を含む）。船中の昼・夕食は各自の負担です。

▼受入れ団体

大同市青年連合会・共青团大同市委員会。

▼申込用紙はGEN事務所に用意しています。申込金3万円を添えてお申し込みください。（☎ 06-583-1719）

再生紙ノートで黄土高原に苗木 神戸・鷹匠中学校生徒会のとりくみ

再生紙ノートをつかって黄土高原に苗木を贈ろう——神戸市立鷹匠中学校の生徒会で新しいとりくみがはじまろうとしている。

少しずつ出回りはじめた再生紙ノート。その裏表紙に木をデザインした小さな「グリーンマーク」がついているのをご存じですか。

そのマークをクラスで集めて、学校近くの姫野文具店に届けると、1枚5円で買いとり、代金が緑の地球ネットワークの竹筒の募金箱に入れられて、黄土高原の緑化に役立てられるというもの。

もっと再生紙が使われるといい、と



考えていた姫野操子さんが、黄土高原緑化協力を読売新聞で知り、翌日にはもう話がまとまった。植林協力はもちろんだが、黄土高原の小学校果樹園建設にも役立ち、日本と中国の子供たちが環境を考える契機になるのだから、1石2鳥どころか、1石3鳥、4鳥の意味をもつ、とのこと。

こんなに呼吸があい、行動がすばやかかったのは、これまでもたくさんの実績があったからだ。バングラデシュのサイクロン、雲仙普賢岳の火砕流、奥尻島の地震など、ことあるごとにバザーなどで協力にとりくんできた。最近では、中国残留日本人女性の里帰りにも協力して、感謝されている。

生徒たちや姫野さんの善意はもちろん、それを見守る先生やPTAのあたたかいまなざしが感じられて、たいへんうれしく思いました。

ソロプチミスト奈良 4クラブが友好林を

社会奉仕や環境問題に熱心にとりくんでいる女性団体・国際ソロプチミストの奈良県下の4クラブ（奈良・いこま・平城・あすか）が、黄土高原の緑化に協力し、「ソロプチミスト友好林」を贈られることになりました。昨年4月の講演会「黄土高原に緑を！」開催が縁で、その後、具体的な協力を追求されていましたが、会員1人あたり3,000円、合計54万余円が集まり、黄土高原の小学校の果樹園建設に協力していただくことになりました。

1月25日に、GENのメンバーも出席して、奈良で贈呈式がおこなわれることになっています。

この機会にぜひ現地を訪れて、緑化にとりくむ人びとを激励し、自分たちも植樹をおこなおうということで、5月ごろに独自の団を派遣することを希望しておられます。実現を期待したいと思います。



ネパール ムスタン サウル村との草の根協力

佐野さん、苦勞しながら現地へ

東間さんが12月11日に、佐野さんが16日に日本を発ってから1か月あまりが過ぎました。寒さ厳しいネパールでどんなことを考え、何をしているのでしょうか。

ネパール到着後、東間さんはジョムソンに入り、佐野さんは別途ネパール入りしていた高力さんの助力を得て、サウル村での協力実現に向けて元気に活動しています。ここでは佐野さんの便りをもとに現地の状況をお伝えします。



侵食、山崩れと石垣に守られた畑



チャンさんと実によく意志疎通ができます)。②シェルパとして一緒に来てくれるカルマ・シェルパの役割。彼は21歳で、小学校3年までの学歴ですが、ネパリー、ヒンディー、シェルパ、チベット語を解し、英語力もしっかりした

もの。3重通訳が十分に可能です。それに、大変にすばらしい青年で、実に得がたい収穫です。～中略～ 今後大金をかけた飛行機にたよったりせずにワーキングツアー、スタディツアーを組織するのにシェルパとの緊密な直接の関係が不可欠ですが、彼カルマは最適です。この間、何度かシェルパたちと交わり、確信をもてます。もうひとつはビザの件でも尽力してくれたナワ・R・ギリさんがオグフさん（2人とも4年来の親友です）とともにトレッキング・カンパニーをおこしました。これも十二分に活用できます。4年前から培ってきた人間関係が、サウル着手にあたって実ってきた感じです。（1月2日、カトマンジュ発の手紙）

いよいよ今年、サウル村での緑化協力が本格的に始まります。進行状況を見ながら、ワーキングツアーも実現したいと思いは広がります。

おおらかに、希望をもって確実にやろう。（12月27日、ポカラ発の手紙）
*佐野さんの手紙からの引用には、多少手を加えてあります。（東川）

協力体制の確立へ向けて

GEN-サウル村を結ぶのに、あまりたくさんの人々が介在し関係が複雑になるとやりにくいので、GEN-サウルの仲立ちは日本人、ネパール人を問わずツラチャン氏一本にしぼります。彼もそのつもり（彼は副署人です）。冬場にさまざまな実際作業をするのは困難だと彼の判断に従い、当面冬には1週間～10日程かけて現地を実際に歩いて、さわって協同の調査、計画作りをしようということになりました。（12月22日、カトマンジュ発の手紙）

ところが、1月5日までしかなかったビザがなかなか延長できないというトラブルが。当初の日程は変更を余儀なくされるが、あくまでめげない。

現場に行きさえすれば、すべてうまくいくと楽観している。12月24日には眼病の治療に来ていた村長とも一緒に話した。現場で、もう少しつっこんだ調査をし、計画を立てる。具体的には、どのぐらいの蛇籠がいくつほどいるか、苗場の最適立地をどこに定める

か、そのための石の手当、村のスタイルの事務所建設の設計など。（12月27日、ポカラ発の手紙）

結局、ビザの問題はおおみそかに解決して、新年早々サウルへ出発、計画の詰めにはいっています。

民衆の協力～人々とのきずな

お金や技術だけの協力では緑化が実現しないことは、昨年の考察でわかっています。現地との緊密な協力関係を保つためにはたくさんの人々の助力が必要です。

今夕、待望の2か月ビザがとれました。若い友人ナワさんの知恵と尽力のおかげ。持つべきは友です。これで1月4日にポカラからサウルへの徒歩行が可能になりました。充分仕事を果たして、1月下旬にはカトマンジュに戻れます。（12月31日、カトマンジュ発の手紙）

タカリー族通訳の青年の日本語力は期待していたほどではない。それでも近い将来の事を考慮して、サウルでは働いてもらいます。この点をカバーするのは①やはり高力さん（彼女はツラ



真冬の北海道・二風谷を訪れて

自然と開発のせめぎあい

GEN世話人 岡田 光 司

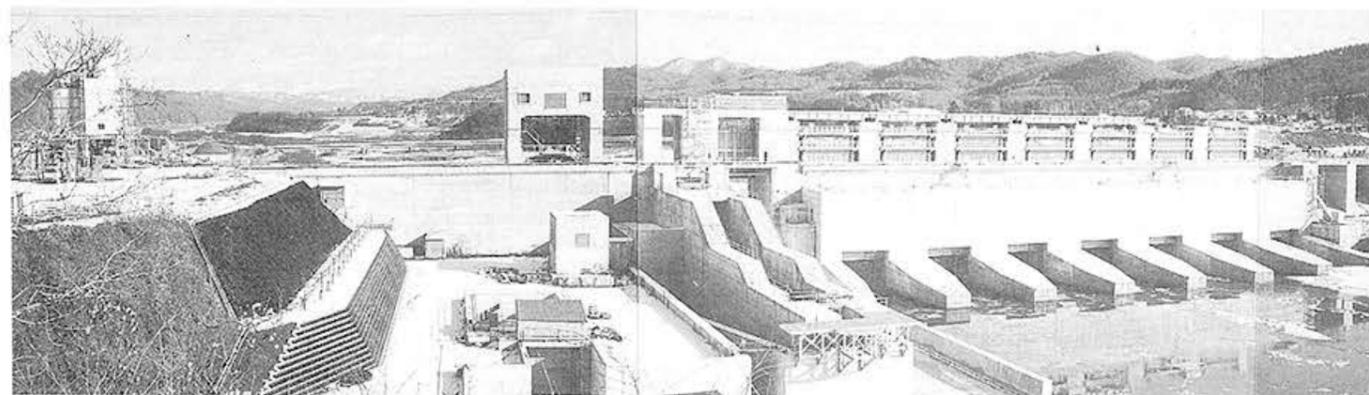
北海道でナショナルトラストをアイヌの人達とどう協力して進められるかを探るべく1月初め二風谷を訪ねた。札幌から南東約80km、人口約八千人の平取町にある二風谷は意外と“町”だった。苦小牧から帯広、旭川へ抜ける国道ではトラックが行き来する。日沙流川を囲む山なみ



熱い思いを語りあって...

寝屋川市 松山 五 郎

少年の頃から、ぜひ行ってみたいと思っていたアイヌの里へ、武田・岡田両氏と3人で行くことができた。1月3日、富川駅まで出迎えて下さった貝澤耕一さんのクルマで夜道を二風谷 沙流川で建設の進む二風谷ダム



高一長い沙流川は、ダム建設、砂利採取の掘削、コンクリート護岸と工事が進み、集落を

囲む山は歯抜けのように木が刈られている。

それでも、一步山へ入ると、騒音は消え、耳を澄ますとやっと小川のせせらぎが聞こえる。うっすらと地を被う雪の上にキタキツネの足跡がいくつも見えた。その下は落ち葉がいく層も重なり、自然が作った肥よくな土地を感じた。

二風谷は、自然とそれを開発しようとする人間がせめぎあっている。マイナス11度の大気は、自然の厳しさというより、人間と自然のピーンと張りつめた対峙を表しているようだ。

へ。家では奥さん息子さんとお姉さんも来られて歓迎していただいた。

さっそく出されたお茶の湯呑みをじっと眺めていたら、奥さんが「気に入りましたか。私の手づくりです」とのこと。うろこ紋様の地にダイナミックな曲線が浮き彫りにされている。うろこ彫りがこの村独特の紋様とのことで



二風谷の位置

ある。鮭の干物をかじりながら、薪ストーブを囲んでの欲談は夜半まで及んだ。

翌朝、沙流川畔を見て廻った。冬枯れのこの時季に訪れたことはたいへんよかったと思う。落葉しつくした林のすさまじさは、近頃造られたつづら折りの林道がよく見える。黒々とした所はエゾ松トド松の人工林、雪でまっ白に見えるのはハゲ山であったり、河川敷から掘り出された川砂利の山であったり、自然破壊の様子が目で見える。二風谷ダムも見た。沙流川を一直線に仕切る堤防は長さ 550m、堤高31.5mとある。より広くより浅く造られるこのダムは、どうみてもムダが多いように思われる。特徴とされる魚道も果して有効なものなのか。

川原に積み上げられた砂利に混じって、たぶん桂かなにか樹齢百年にも及ぶ埋もれ木の破片があった。かつてこの沙流川一帯が鬱蒼とした森林であった

【5ページへつづく】

たことを想像させる。巨大な切り株は貝澤家の庭先にもあったし、ラーメン屋のメニューも木の切り株に書かれていた。博物館のものは450年を越えるものだった。アイヌの人たちの、森に寄せる思いを感じさせられる。

博物館は特別に頼んで見せていただいた。

展示品の中にアジアの少数民族の帽子があった。私はウイグル族の帽子をかぶっていたので、館長さんに「ウイグルのものがありませんか」とたずねると、無いとのことだったので「私のを差し上げますからいっし



アイヌ博物館前で貝澤耕一さん(左端)と。



沙流川から掘り出された砂利の山と埋もれ木

よに展示して下さい」。 「ありがとう」と言われた後で、「アイヌにはこういう言い方があります。帽子がこちらへ来たがっている、貴方の所にもう飽いたのです」と。プレゼントはこちらの心と想っていたが、帽子自身の心だったとは。

4日の夜は、親戚の若者や友人も交えて、「森が泣いている」「今ならまだ生きられる」「破壊はもうしてはな

らない」「折り合って共に生きていける自然を取り戻さねば」……それぞれに熱い思いを込めた論議で、今日もまた夜ふけとなった。その中で「ひとりでも多くのシサム(隣人)に、アイヌのことを知り、関心をもってもらいたい」と力説された貝澤さんのことばがあった。

堀越由美子さんを囲む車座トークに参加して 岡田光司

前号で喜多さんが指摘したように、私も「都合のよい時だけアイヌになるアイヌの人が多いように見受けられます」との堀越さんの発言が一番気にかかりました。というのは、この問いかけが我々和人に投げかけられているように思えたからです。つまり、「和人は都合のよい時だけアイヌを日本人にし、悪くなるとアイヌだからと差別、略奪してきた」との問いかけに聞こえたからです。

歴史を振り返ると、和人はアイヌに「天皇の民」であることを押しつけ、言葉を奪い、さらには戦争に狩り出しました。その一方で、旧土人と呼ばれ、保護の名目で土地を奪い、差別してきました。和人はアイヌを都合のよいように扱ってきたのです。

「都合のよい時だけアイヌになるアイヌ」を考える時、そうさせた我々の行動こそ振り返るべきだと思います。

GEN 自然と親しむ会 炭焼き体験しませんか

里山の復活をはじめ、エコロジーとの関係で最近、大きく見直されはじめた炭焼き。3月のGEN「自然と親しむ会」は、「南河内水と緑の会」のお世話で、河南町、持尾の山で、窯出し、窯入れ、火入れ等を体験します。

お昼のブタ汁を食べながら、早春の野山を楽しみましょう。

●3月12日(土) 雨なら3月13日(日) 朝8時20分

●近鉄「富田林」駅 改札口集合

先着10名までです。お問い合わせ・申し込みは、☎06-583-1719 まで

日本ビジネススクール専門学校 「国際交流とエコロジー」作品展のご案内

昨年、エコロジーバッチの売上げをGENの緑化資金に協力していただいた日本ビジネススクール専門学校デザイン学科の作品展が、ことしも「国際交流とエコロジーII」をテーマに開催されます。現代のテーマを若々しい感性で切り取った作品を

ぜひごらんください。GENの黄土高原緑化協力のパネルも展示される予定です。

◆大阪国際交流センター1F

◆2月26日(土)13:00~17:00

27日(日)9:00~17:00

28日(月)9:00~13:00

トピアリ作り楽しむ GEN自然と親しむ会

昨年12月5日、神戸市立森林植物園で「トピアリ作り」を学びました。指導はフラワーデザイナーの田中まきさん。そのようすは右の新聞記事を見ていただくとして、みんなたいへん熱心にとりくみました。そのとき先生にほめられて（お世辞でもいい！）、その後も、山歩きのために、木の実やつるをとってリースづくりに凝っている人もいます（じつはわたし）。

パソコンの援助をうけ

次号から編集が変わります

会報「緑の地球」の編集方式を次号から変えます。パソコン（マッキントッシュ）の導入を援助しようという方があり、DTPに切り換えることにしました。印刷の品質は少し落ちるかもしれませんが、労力と時間は大幅にはぶけ、また多くのかたに編集に加わっていただくことが可能になると思います。協力してやろうという方、興味のある方、いっしょにやっていきませんか。事務所までご連絡ください。

なお、若干のトレーニング期間を要するため、2月号は休刊いたします。

毎日新聞 93年12月6日朝刊



個性がキラリ

木の実や葉で トピアリ作り

神戸市立
森林植物園

森の中で見つけた自然の素材を使った、クリスマスツリー風のトピアリ作りの会（緑の地球ネットワーク）が五日、北区の市立森林植物園で行われた。自然の中で散策しながら、枯れ葉などに触れようという企画。家族連れなど約五十人が参加し、それぞれに思い思いの芸術的なツリーやリースを作成した。

参加者は午前中に、植物園周辺で、地面に落下したムラサキシキブ、ウメモドキの実や、ヒイラギの葉、紅葉、枝を材料として拾い集めた。午後からは円すいの形にした吸水性スポンジをツリーの木の代わりにして、表面に緑色のコケを貼り付け、ツリー風に作り、その上に材料の木の实などを飾り付けを行った。

家族四人で参加した芦屋市若葉町二、会社員、川崎正之さん（三）らは、子どもたち二人が個性的なツリー作り。長女、絵里奈ちゃん（九）と「同市立潮見小三年」は松ぼっくりだけのシンプルなツリーを作ったのに対して、長男で同小一年の亮人君（六）は拾ってきた松ぼっくりなどをすべての材料を使って派手に飾り付けた。

山西省の自然

石原 忠一
(92年緑化協力団団長)

⑰ 五台山(1)

わが国の古代史にかかわる最古の文献は『魏史倭人伝』です。陳寿(233-297)という人が撰したといわれる、魏、呉、蜀の3帝国の史書65巻のなかの「東夷伝」に、はるか東海にある異民族の国として、好意的に書かれています。魏の天子に貢ぎ物をささげるためにやってきた、親しい辺境の国であるという書き方です。

当時の先進地域・中華へは東夷、南蛮、北狄、西戎からさまざまな貢ぎ物がささげられており、そのなかに大昔の日本も顔をだしているのです。

魏や晋の古い話にはとおい郷愁のようなものを感じさせられます。

そのころまでに遠くインドでさかえ

た仏教文化は、はるばる中央アジアをへて中国へたどりつき、多くの文物をあつめて華麗にさかえていたのです。

インドの高僧たちは、炎暑の地から北方につらなるヒマラヤの嶺々に神聖な世界を想像し、須弥山という理想郷を描いていました。中国の地にたどりついて、自らの生涯の場、末代への功德を思って、聖地をもとめ、この山西の地に清涼山をさだめ、やがて五台山として秀才たちを集めたと考えられます。

わが国には富士、御嶽、乗鞍の3火山をふくめて、日本アルプスに15座の3000mをこえる山々がありますが、いずれも峨々としたけわしい容姿をしています。しかし、この大陸の地塊に支えられた五台山は、北台頂3061mという高山で、日本でならハイマツのつく山々なのですが、なんとやさしく、なだらかな容姿で私たちを迎えてくれたことでしょう。



なだらかな容姿の五台山・北台頂 (3,061m)

日経の鹿児島記者が大同渾源の緑化取材

日本経済新聞の鹿児島島嶼記者(環境記者クラブ)が昨年末、大同市・渾源県で緑の地球ネットワークの緑化協力のようすを取材しました。それが左のような記事になっています。私たちとはすこしちがう角度からとらえられていて、参考になりますので、転載させていただきます。

中国では94年元日から兌換券の廃止などが替制度が大幅に変わり、昨年末1元=19.5円だったものが、1元=13円になりました。たとえば文中の緑化費用1ha3万円は1ha2万円、苗木代などもほぼ3分の2になります。

北岳恒山の植林地は山腹の南面にあり、乾燥が激しく、土壌の薄いところですが、この山の特殊な位置から地元の人あえて挑戦しています。93年夏に雨が降らなかつたこともあって、活着率がとくに低くなっています。

これまでの緑化協力 120万本・500haに

黄土高原における緑化協力は順調にすすみ、94年春の植林にむけた準備も進行しているとの連絡が現地からありました。

各方面のみなさんのご協力で、2年目の93年度は当初の目標をかなり上回ることができそうです。資金面での協力は、3月までに最低でも80万円に達します。協力ポイントは15か所になり、植えつけられる苗木は120万本以上、面積はほぼ500haに達し、3か所の協力苗圃で140万本以上の苗木が育っています。順調に根づいてほしいものです。

環境保全東アジア始動

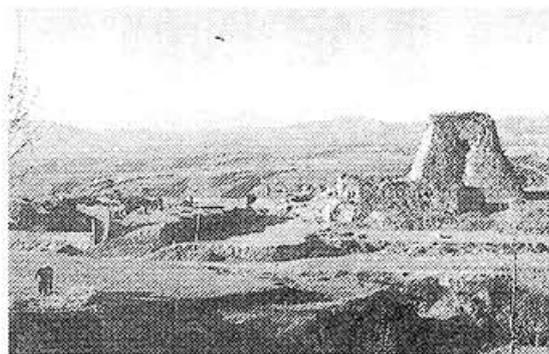
みなのである。植林の成否を見極めるには時間がかかるが、中国側の期待は大きい。「緑の地球ネットワーク」は、九二年から緑化の協力に乗り出した。日本の民間団体による中国への環境保全に欠かせない。

中国の山西省。四世紀末から五世紀にかけて北魏(ぎ)の都として栄えた大同市から南に向けて車を走らせた。日中でも気温は氷点下。冷えきった風が当たる。肌が痛く、乾燥した大地からは土煙が舞い上がる。木がほとんど生えず岩肌を露出した山々。黄土高原の名のとおり力なく半乾いた大地が広がる。

戦後、水土流出を防ぎ自然を回復させるため、山西省は積極的な植林策をとった。一九五〇年代は省の面積の二割程度だった森林被覆率が、現在は一七%にまで回復している。しかし、「資金不足でなかなか思うように進展しない」と渾源県の温増玉林業局長は説明する。

民間環境保護団体である緑の地球ネットワーク(代表世話人佐野茂樹氏)は、九二年から緑化の協力に乗り出した。日本の民間団体による中国への環境保全に欠かせない。

苗木は松類が一本当たり二十円、ポプラが同六十円程度。中国聖山五岳の一つである恒山山腹の植林地約七畝には、九二年同華大同市



中国の黄土地帯では土壌流出で耕地が失われ農民の暮らしも向上しない

地球の生態学

「政府助成の拡大を」

である渾源県では、一人当たりの平均年収が日本円にして七千九百円。山間部では二千四百円しかない。劉懐光大同市委員会副書記は「典型的な貧農地帯」と言う。中国の一人っ子政策も農村までは十分浸透せず、戸籍のない「黒孩子」と呼ばれる子供も多い。高見氏は「家庭保護局局長と奨励する構えだ。緑化活動に従事してもらえば、わずかの収入でも暮らしの足しになる」と話す。植林は緑を回復するだけではないのだ。植林協力とともに、地元の小学校に果樹園を設ける計画を進めている。アンズやクルミなどの苗木を児童に植えさせ、学費に労賃を払う。将来は果実を売って学校の運営費に充てる。「環境問題は生活の改善、貧困の解決と表裏一体。環境教育の効果もある」(高見氏)。

「黄土を再び緑に」

日本民間団体、植林に協力

森林破壊で気候一変
黄土高原も太古の昔は水と緑に恵まれ、象をはじめトラ、オオカミなどさまざまな動物も生息していた。その森を人が切り開き、その後、耕地・放牧地の造成や万里の長城を造るレンガを焼く薪をとるために伐採を続け

山西省の実情を知った日本の緑化成功は「神頼み」

委員書記。一方、同ネットワークの世話人である高見邦雄氏は「中国側関係者には強い信頼関係を築くことができる」と強調する。人口三十二万人の多くが農民

「科学技術部 鹿児島島嶼」

「政府助成の拡大を」

「科学技術部 鹿児島島嶼」

少しでも多く木を植えます

大同県徐町郷の農民・王有財さんの手紙

わたしは大同県徐町郷徐町村の農民で、王有財といいます。郷の幹部たちの話によると、いま私たちが植えている苗木は、日本の友人たちが贈ってくれたものだということです。私たちはみな、生まれてこのかたこの黄土高原でくらし、ほかの地方を見たことがなく、外のことはなにもわかりません。

あなたたちがこの村にきて、植樹のためのお金を協力してくれたことで、わたしたちはやっと、この村が水土流失のたいへん厳しい地域であることを知るようになりました。このようなことは、私たちのまわりだけ、この村の

環境だけの問題ではなく、もしこの状態をほおっておけば、地球全体の環境にも悪い影響を与えるそうです。

村のまわりを緑化し、水土流失を防ぐことは人類全体にもかかわりのあることであり、この村に長くくらし、わたしたちの責任なんです。みなさんはこの村にきて、いっしょうけんめい木を植えるよう、わたしの目を開かせてくれました。この感謝の気持ちは、たったひとつの手紙に書けるようなものではありません。すこしでも多く木を植え、この村の環境をよくし、そして全人類の事業のために、ほんの少しでも役立ちたいと思います。

編集後記

暖冬続きの日本ですが、今年は久しぶりに冬らしい冬で、スキー場雪不足のニュースを聞かなかったのは何年ぶりでしょう（ボーゲンどまりのわたしには縁がありませんが）。スキーを楽しんだ方もいらっしゃるでしょう。

お正月といえば、思えば？年前、社会人となってからは出ていく一方だったお年玉（あたりまえか）、今年はなんといただいてしまいました。これはなかなか幸先がいい！と喜んでいるわたしです。ところでGENにも少し早めのお年玉がありました。前号でお願いした印刷機を、さっそくゆずっていただくことになったのです。本当にありがたいことです。多謝！

それではみなさん、今年もよろしくお祈りします。 (東川)